
夢屋

尚人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢屋

【Nコード】

N1301C

【作者名】

尚人

【あらすじ】

もし、夢が現実になったら。ここは、そのもしをかなえる店。中から出て来るそいつにどんな夢を見たいか言うだけ、あなたの夢叶いますよ。でも、気を付けて下さい彼はあなたを変えてしまうから。。。

プロローグ 夢の中

プロローグ 夢の中

目の前に広がるのは、一面の花畑。これまでに見たことの無い程美しかった。僕は自分の置かれている状況はすぐに理解できた。

「ああ・・・俺、死んだのか・・・。」

三途の河を渡る使者達の中に見つけたのは先日メディアに大きく取り扱われた、議員の顔があつたからだ。だが、彼は後悔はしていなかった。しょうがないと思つたし、自分が生きていても意味が無いと感じたからだ。彼は迷うこと無くその河を渡る小さな船を待つ者達の後方に付いて並んだ、それから間もなくしてからだ奴に声を掛けられたのは。

「彼方はこれで本当にいいのですか？」

背の低いコイツは僕を見上げていた。いや、僕の背が高いのか・・・。そいつは一指し指を僕の目の前に突き出し言った。

「君は知らない様だけど、あまり人を見下さないほうがいい。」

まるでテレビを見ているかのような感覚が頭の中で広がりそこに映し出される者は自分の知っている者達だった。母親は何処かに電話をし、受話器を置くなりその場でしゃがみこみ唯涙を流すだけだった。親友は空を見ていたが、その表情は何時もの彼ではなくまる

で生気が無い。

「悲しいな、悲しいな。身近な人が居なくなるとまず感じるのが、その現実感の無い全く悲しいとは無縁の心境だ。君は僕の所に死にた言つて来たけど、本当に死にたかったの？」

沈黙が続く。唯そんな中、僕が並ぶ列は刻一刻と自分の番に向け進んでいる。

「ほら、次は君の番だね。」

その言葉を聞くや否や彼は後悔を始めた。今までに感じたことのない感情が彼の中で膨らんだ。なぜ、自分はこんな所に来てしまったのか。まだ、やりたい事があつた。あの人にまだ何も伝えてない。涙ぐむ彼は振り返り、自分を見上げているそいつに言った。

「帰りたい、帰りたい。もう死にたいとは思わない。だから、返してくれ。現実に戻してくれよ。」

「おかしな事を言う、ここは現実ですよ。でもまあ、そんなに帰りたいのなら代償を払ってもらいますよ。」

「払うよ、払うから、いくらだよ……。」

「お金ではありませんよ。感情の一部です、死への執着心を払ってもらいます。」

河の流れは緩やかだ、船をこぐその音は僕には聞こえていなかった。僕はそいつの言っている意味は理解できなかったが、帰れるのなら何で良かった。こんなに生きていたいと思つたのは初めてだっ

たからだ。そいつはニッコリ笑うといった。

『良い夢を……。』

目が覚めると、いつもの天上いつものベッドだった。母が自分を起す声は何だか懐かしいように感じた。僕はその日以来、自分を傷つける事をやめた。あの時にあった感情は今ももう無い、変わりにあるのは希望の二文字だった。僕は昨日会ったそいつの所に行ったが、そこにはもう昨日まであった夢屋看板を掲げたあの不思議な感じのする店とそいつの姿は無かった。今思えばあれは夢だったのかも知れない。

二人を一つに（前書き）

簡単な作品になってしまいましたが、その中にある深みを見つけ
てください。

二人を一つに

第1話 二人を一つに

有紀 命は姉、有紀 瞳とは二卵性の双子の姉妹である。瞳は妹命に比べ成績も良く彼女は妹の命より常に上にいる存在であった。第三者はそんな彼女達を常に比べていた。当然親も例外ではない、それ故に彼女は次第に姉を嫉むようになっていった。

飼い猫を追いかけて命は路地裏に入ってしまった。猫のク口はそんな命などお構い無しに闇の中へと消えて行ってしまった。彼女が諦め、振り返った時だった。今まであったのが気がつかなかったのか、古ぼけた建物が人目を拒み建っていた。

「夢屋？こんな所にお店？」

まるで見えない何かにつ張られるように彼女はその店の中へと入って行った。カラシカラシ、ドアに付いた鐘が揺れ動く。店の中は狭くアンティークの並んだケースの置くにひっそりとカウンターがあるだけだった。目の前のアンティークドールに見惚れていると置くから声がした。

「いらつしやい。」

振り返るといつの間にかカウンターに自分と同じ年くらいの少年がそこに座っていた。

「で、ここへはどんな夢をお求めに？」

勧められるままに彼の目の前に座り、命は彼に問い返した。

「あの〜ここってどんなお店なんですか？夢屋って？」

えっとびっくりした顔をした彼は突然、笑い出した。

「あなたには夢があるでしょう。絶対に叶えられない夢が、それを私が叶えるそんな店なんですよ。」

「私、そんなものではありません。お邪魔しました。」

そう言つと彼女は椅子から立ち上がり、出口の方へと歩き始めた。

「お姉さんが羨ましいんでしょう？自分と姉を比べられるのが嫌なんですよ？」

命の足が止まった。彼女は振り返り言った。

「本当に何でも叶えてくれるの……。」

はいつと彼が答えた。

「私、いつも姉と比べられて来たの、瞳は勉強だつて運動だつて私よりできる。だから私はいつも瞳になりたかつた……。」

「叶えますよ。あなたは唯願うだけでいい。では良い夢を……。」

ピピピピピピ。目覚ましのアラーム音で彼女は目を覚ました。

階段を下りて行く、母の用意したトーストはまだ温かい。

「今日はお母さん早番なのか……。瞳はもう学校に行ったのかな？」

静まりかえる家は今日は何だか不気味に見えた。学校はいつもどおりだった。同級生は昨日のテレビの話や雑誌の話なんかで盛り上がっていた。しばらくして、担任教師が来て朝のホームルームが始まる。話が終わり、皆は一時間目の数学の用意を始める。

「いけない、教科書忘れて来ちゃった。お姉ちゃんに借りて来なきゃ……。。」

渋谷命は隣のクラスにいる姉の元へと向かった。教室前にたまる女子生徒に姉を呼んでもらう為に声をかけた。

「あ……。あの、お姉ちゃん呼んでもらえる？」

女子生徒がお互いに顔を合わせ笑った。

「命ちゃんお姉ちゃんなんていないじゃんか。もう何言ってるの。」

そう言うのと彼女達は教室へと戻って行った。残された命は彼女達の言葉の意味が理解できなかった。佇む彼女に声を掛けたのは数学の教師の北岡先生だった。

「なにやってんだ有紀ほらさっさと教室入れ。」

「じゃあ授業始めるぞ……。」

不思議な事に今まで苦手だった数学がスラスラ解けるのだ。何度か当てられたが、彼女は難なくそのつど完璧とも言える回答を出し

ていった、まるで姉の瞳の様に。

「ねえ命お願い今日の部活の練習試合助っ人で入ってよ。」

この光景もいつもは瞳そのものである。

誰一人として、有紀 瞳の存在を知っている者がいなかった。それどころか、自分自身が姉であった瞳の様に運動や勉強が出来るようになっていた。命はこれまでに味わった事の無い優越感を味わっていた。だが、それと同時に何だか心にポツカリと穴が開いた様にも感じていた。命は姉と一緒によく行き、捨てられていたクロを見つけた神社に来ていた。ニヤァッと其処にはクロの姿があった。命はしゃがみ、クロの喉を優しくなでた。

「あのねクロ、私お姉ちゃんがいた時は一人っ子がよかつたって思ったの。今のままの私にとってはも幸福だけどそれと同じくらいさびしいの……。ねえどうしてかな？」

にわか雨が振り出した。彼女は前にもこんな事があつたと雨に打たれながら思い出していた。あの時はどうしてだかわからないけど、雨の中で私は泣いていた。肌当たる雨は何だかとても重たくて冷たかった。その時もお姉ちゃんは私を探しに着てくれた。

「こんな所にいたの。」

そう言っつて私を傘の中に優しく招きいれ、微笑んでくれた。

「風邪引きますよ。」

夢屋の少年だった。傘の中に命を入れた彼は問いかけた。

「どうです？あなたの望んだ夢になりましたか？」

彼女は首を縦では無く横に振った。

「私、お姉ちゃんといつも比べられて育ったの・・・だから何でもできるお姉ちゃんが羨ましくていなければって何度も思ったわ。でも・・・お姉ちゃんを・・・お姉ちゃんを帰して・・・。」

彼はゆっくり答えた。

「いいんですか？」

「ええ。」

彼女に迷いは無かった。

「では、元に戻す代償にあなたが他人を嫉むその感情をほんの少し貰いますよ。」

彼女は笑って首を縦に振った。

「では、よい夢を・・・。」

双子の姉妹、瞳と命は仲良く手を繋ぎながら元気に登校していた。

「考えてみれば不公平だよな、双子だからって全く違う人間同士を比べられて。でも、よかつたなお前の飼い主達元気になって。最初にお前に相談された時は正直最初どうしようかと思ったよ。」

夢屋の少年は屋根の上で日に当たりながら姉妹を見ながら言った。

ニヤーと隣にいるクロが鳴き声をあげた。

都合のいい世界

第2話 都合のいい世界

どんと肩をぶつけた少年が怒った。

「道を歩く時は俺を避けて通れ。まあ次は無いけどな。」

そう言つと^{かりのしゅうぢ}苅野終夜は肩をぶつけた相手を消し、笑った。

「最高だよ、いい世の中になった。ははははは。」

彼がこの世界を望んだのは、唯ウザイという感情の為だけだった。目に映るあいつがウザイ。俺に声を掛けるあいつがウザイ。同じ時を生きるすべての者がウザイ……。

「あなたの夢叶えましょうか？」

始めはウザかった。その男は終夜に望みの世界を与えた。終夜は初めにその男を消した。次に家族、同級生と次々に気に食わない奴を消していった。彼が通るいつもの商店街は活気が無く、其処通る者は既にいない。

終夜はいつもの川沿いの土手へと急いだ。そこでその男は煙草を吹かしながら其処に座っていた。

「明、今日こそてめーをぶっ殺す。」

その男は又かとゆっくり振り向き、煙草の火を消した。彼はいろんな人間を消してきたが、彼だけは未だに消していなかった。彼は終夜の認める唯一の人間であろう。

結果は僅かな差で終夜は何時も負けていた。彼は悔しさの隣では次第に別の感情が芽生え始めていた。

気を失ってどれ位の時間がたっただろうか、地平線の向こうに夕日が沈みかかっていた。

「なあ。お前さ、そんなに強いのにウザイ奴とかいないの？あの分けの分からん部の奴らとかどうなんだよ。俺が消してやろうか？」

その男は笑いながら煙草に火をつけ、芝生に寝転ぶ終夜を見ながら。

「俺も昔はお前みたいに周りの奴が気に食わなかったよ。今でも俺はそう思うことがあるくらいだ、でも俺は出合っちゃったからな。夢ばかり見てるあいつはオタクだし、もう一人は何考えてるか分からん奴だな。でもそいつの入れるコーヒーはうまいんだ。」

ふ〜んと鼻を鳴らした終夜は、話し込む男の話に耳を傾けた。

「俺は今でも何であんな所にいるのか良く分からないけど、あいつ等に言われたからな、お前の見ている世界はもっと立派なものだ。て。まあ何が良くて悪いのかなんてわかんないけど、俺はそれ以来変わったんだよね。」

「分け分かんねーよ。」

そっぽを向く終夜に明は柄じゃねえーなどと小さく呟いた。

「お前は毎日毎日あの夕日みたいに同じ事を繰り返してる。お前は俺に勝つたらどうするんだよ。ま、負けないけどな。」

「別にその後の事なんか考えてねーよ。お前をぶっ飛ばした後の事なんか。」

「つまらない奴だな。」

「じゃあお前はなんで毎日此処に来るんだよ。」

「此処はな、俺の唯一の居場所だったからな。でも今はあの夕日見ただで来るんだよ。お前とも喧嘩できるしな。」

何だよそりゃと終夜が笑うとつられるように明も声を出して笑った。

「じゃ俺、帰るから。」

明が帰って行った。残された終夜は地平線の向こうに半分以上沈んでしまった夕日を眺めていた。

「どうです。夢は叶いましたか？」

あの男だった。終夜はふんと笑って答える。

「叶ってねーよ。お前も出てきたしな。でも、マジだなあの時よりは明にも会ったしな……。で、俺はどうなるんだ？お前に殺されて終わりか？」

男は笑って答える。

「まさか。唯、何か不満が無いかを問いかけに来ただけですよ。すぐに消えますよ。そうしたら又あなたの世界です。」

「不満ね……。じゃあ俺が消した奴らを元に戻してくれよ。」

「あなたの世界じゃ無くなってしまいますよ？」

「ああいいよ。俺はもう欲しい物が分かったからな。出来るのか？」

「出来ますよ。その代わり私の言う事にしたがってもらいますが？」

終夜は男の顔を見た。

「では、あなたが初めいららないと言って受け取らなかった物を受け取って下さい。あなたの居場所を……。」

沈む夕日を眺めながら、終夜はうなずいた。小さくありがととその男に言った。ふふと男は笑顔を見せた。

「では、良い夢を……。」

夕日が沈み、街灯に光が灯った。

都合のいい世界（後書き）

ここに出てきた明は、七不思議部の明です。同じ世界感を持って見てみてください。

解けないパズル

第3話 解けないパズル

何も無い空間に少女は一人で其処にいた。目の前にはフードをかぶった男は、少女にある物を渡した。渡されたそのパズルは黒かった。

「これを完成させたら、ここから出れるから。」

そう言つてその男は何処かに行つてしまった。もはや少女にはその後姿をただ見ることしか出来なかった。それから、少女がそのパズルをやるようになったのは……。

「又、1ピース足りない……。」

真っ黒なパズルの真ん中だけが空いていた。少女はそれを確認してそれを又、バラバラに崩すのであった。いつからだろう、少女がそれを数えなくなったのは。

「かすがみともみ上神友美さんですね。」

振り返ると、其処に居たのは少年だった。

「おっと、これは失礼。私、夢屋のオーナーです。あなたの夢を叶えに来ました。」

ガシャーン、ガラスのアンティークが音を立てて砕け散った。

「す……すみません。これ弁償させていただきます。」

ペコペコ頭を下げるこの男は長井智成ながいともなりである。

「いえいえ、それより怪我はありませんか？」

智成が彼に抱いた第一印象はいい人だった。

「それより、あなたの夢は何でしょう？叶えますよ。」

オーナーの少年は、彼が壊したアンティークの破片を片付けながら言った。

「もう一度、もう一度。彼女に会いたい。もう一度、彼女に合わせてください。彼女の夢を見せて下さい。」

「ええいいですよ。」

彼の顔に笑顔が戻った。

別に彼らは悪人では無い。どちらかと言うと今までの人生では善人に近いだろう。特に彼、智成は老婆の手を引き横断歩道を渡るなど周りからの印象はいいものだった。全くの偶然だった。そう、運の悪い偶然。突っ込んで来た車の運転手も無論、悪人ではなかった。働きづめの運転手はちよつとしたハンドルミスで彼女を襲ってしまった。

友美の容体は深刻だった。奇跡的にその命が助かったものの、彼女が目覚める事は無かった。体は機械に繋がれ、彼女の命はその機

械によつて支えられていた。いわゆる植物状態であつた。そんな彼女の所に智成は毎日の様に通つた。成り立たない会話で彼女が目覚めたらどれだけ嬉しい事か、だが彼の願いは叶わなかつた。

帰りの途中たまたま見つけたこの店に吸い込まれるように彼は中へと入つて行つた。

「友美。友美なのか？」

「智成さんなの？」

二人はその真つ暗な空間の中で出合つた。二人はお互いを強く抱きしめた、力いっぱいその再開を噛み締めた。

「勝手な事をしてもらつては困るな、夢屋……。」

あのフードの男だつた。震える友美をこれでもかと智成は彼女の体を抱きしめた。

「これはこれは、案内屋。勝手な事とは？」

「その女はまだそのパズルを完成させていない。ここから出すわけには行かない。」

智成は彼女が居た場所を見ると其処には真ん中が空いたパズルがあつた。

「1ピース無いの……。完成しないのよ……。」

ふふとフードの男は不気味に笑つた。

「おや、そんな事でしたか、それなら心配ないでしょう。智成さんポケットを見て下さい。」

智成は言われるままに自分のポケットをあさった。何かが手に当たった。パズルだ、彼が出したパズルは真っ白だった。それを優しく友美に渡した。それを彼女は真ん中に埋め込んだ。

「出来た……。出来たよ、智成。」

笑顔の彼女を見て、フードの男は何だか呆れていた。いや、これは彼女では無く夢屋の少年へだった。

「お前も甘くなったな。でもこれで俺もやっと仕事が終わったよ、さっさと帰って寝るわ。」

じゃっと夢屋に手を上げ彼は又、その闇の中へと消えていった。

「ありがとうございます。」

「いえ、では報酬を貰いますよ。」

「はい。私の命でしたよね……。」

えっと友美は智成の顔も見た。彼もまた、彼女の顔を見つめた。

「君が幸せになるなら、何でもするよ……。」

彼の言葉に涙した。

「いえ、そう思ったのですが、今回は違うものを貰います。」

夢屋の少年は智成を見たあと、今度は友美を指差し言った。

「実は智成さん、あなたが壊したアンティークあれお気に入りですね。友美さん、あなたのポケットのそれ、もらえますかね？」

智成が見つめる中、友美は自分のポケットの中に手を入れた。出したそれは、まぎれもなく智成が落として割ってしまったアンティークだった。それを夢屋に手渡しで渡すと夢屋はニッコリ笑顔を見せて言った。

「毎度ありがとうございます。それとあなた方が見つけられたパズルのピース、大事にしてくださいね。それでは、良い夢を……」

自分の名前が呼ばれた、そんな気がした。智成が目覚めると其処は病院の一室。目の前には友美が目には涙を浮かべ其処に居た。

「あれは夢だったのかな？」

不思議そうな顔をした智成に友美は首を振った。彼女が差し出した手の中に、あの真っ白なパズルのピースがあった。そして彼女は言った。

- ありがとう -

失った者達

第4話 失った者達

森野昭三もりのかげみごく普通のサラリーマンである。彼はいつもの様に目覚ましの音で起された。リビングには既に妻の森野加奈子もりのかなこが朝食の用意をしていた。

「おはよう。あなた。」

エプロン姿が良く似合う。昭三は頭を掻きながら、その姿に見惚れていた。うふふと笑った彼女は又、ネギを切り始めた。

昭三は洗面所に行き、その不揃いのひげをそり始める。しばらくして、娘の森野恵子もりのかいこが顔を洗いにやって来た。

「お父さん、おはよう。」

あくびをしながら、そう言うと水を出し始める。

ああ、おはようと昭三は娘に返し、一足早くリビングへと戻った。其処には、目玉焼きや味噌汁といった朝食が並んで既に並んでいた。比較的早起きのこの一家には朝はそれなりに時間の余裕があった。

「ねえ〜いいでしょお父さん。あそこのペンダントかわいいのよ〜。」

「ああ、今度のテストがいい点だったらな。」

そう笑って昭三は娘のおねだりをうまくかわした。

「おっと、もう行かなきゃじゃ行って来るよ。」

玄関先では行って来ますのキスを妻、加奈子の頬にした。鞆を渡され、今日もまた昭三は会社へと向かった。いつもの満員電車は未だになれない。会社での彼の地位はそれほど高くは無かったが、仕事が出来た為上司や部下からは期待される存在だった。こんな毎日が彼には幸せだった。

流石に彼でも残業は嫌なものだった。それでも、急に倒れた部下の仕事の後始末はきっちりやらなければ気がすまなく、もう時間は夜中の十二時だった。

「遅くなったな。」

腕時計を見ながら呟いた。ふと顔を上げると赤い景色が目飛び込んで来た。彼は全速力で走った。

火事だ。自分の家の前には消防車と救急車が何台も集まり、消火活動をしていた。最悪の状況が頭に過ぎった。

「加奈子・・・恵子・・・。」

無意識の内に口にしたその言葉が彼には重く押し掛かった。

もはや以前のその家は面影すら無くなっていた。崩れる建物の周りには、野次馬が集まっていた。

「危ないから下がって！」

そんな消防員の声が当たりに響く。

「妻と娘が……。妻と娘はどうしたんですか!？」

人ごみを押しつけ、昭三は家へと向かった。

「危ないですよ!」

「妻と娘が、妻と娘がいるんです!」

あつとその消防員が静かに首を振った。

『 昨晚の火事は火元から見て放火の可能性が高いと……。』

テレビから聞こえるその声は昭三の心を縛り付けた。魂の抜けた様なその様子からはもはや、以前の昭三の面影はなかった。そんな彼がこの店に迷い込んだのは何時だろう。その古い建物に吸い込まれる様に中へと入っていく。狭い店内に所狭しと並べられたそのアンティークに見惚れている昭三に声を掛けたのは夢屋の少年だった。

「どんな夢をお求めですか？」

「妻と娘にもう一度会いたい……。出来るなら、あんな事をした奴に……。」

「駄目です……。」

昭三の言葉を最後まで聞く前に夢屋の少年が言った。

「叶えられるあなたの夢は一つだけ……。」

彼は悩んだでその答えを出した。

「妻と娘に会いたいです……。」

彼は笑いながら言った。

「良い夢を……。」

目が覚めるとそこには、見慣れたリビングが目に映った。

「あなた……。」

「お父さん……。」

振り返れば、其処に妻と娘の姿があった。涙で濡れるその瞳で彼女達を見つめる。

「加奈子……。恵子……。」

そう、昭三は小さく呟くと二人を抱きしめた。その後の会話は要らなかつた。三人は何時まで何時まで抱きしめ合った。昭三がそのポケットから恵子の欲しがっていたペンダントを取り出し渡した。そして二人にキスをした所で彼は目が覚めた。

彼は今日も何事も無かつたかの様に会社へと向かうだろう……。

「あなたの望みはその炎で全てを燃やす事ですか？」

夢屋の少年はその男に言った。男は少年の姿を見て逃げ出したが、彼からは逃げられなかつた。

「うふふ。では、良い夢を・・・。」

その断末魔の叫びは周りには聞こえない男の事が知られたのは、
その次の日の事だった。

天使になった少女

最終話 天使になった少女

夢屋の少年がまず驚いたのは、彼女のその一言だった。

『天使になる事が出来ますか？』

彼はその意志であらゆる者を招き入れられるが、彼女は違かった。自らの意志で来た者を見たのはこれで二度目だった。その少女は夢屋の少年を見るなり天使になりたいと言ったのだ。

『それとも、もうすぐ死んでしまう私には無理ですか。』

彼女は病気。残り半年の命だと夢屋の少年は直に分かった。

「分かりました。又、明日ご来店下さい。」

そう言って彼女を返した。彼女は優しくかった。その人間性なのか、夢屋の少年は彼女に好意を抱いた。

約束どおり、彼女は次の日も来た。

「あなた、病気なのに良くこんな所に来れますね……。」

彼女は笑った。

『いいんです。私はもう、十分に生きました。』

悲しそうな笑顔。その日も関係の無い会話で日が落ちた。彼女は明日も来ると言って店を出て行った。

『私。今日、クッキー焼いたんです。良かったら……』

おいしかった。その一言で彼女は喜んでくれた。

『明日は海に行きませんか？』

この日は天気良かった。波の音を背に彼女は自分の生い立ちなんかを話してくれた。何日か彼女はこの夢屋に通ってくれた。2ヶ月が過ぎた時、彼女は突然ここへ訪れなくなった。彼には何故かを直に理解できた。

病院の個室で横になる彼女は痩せていた。呼吸機を付け、腕には点滴が痛々しく繋がれていた。夢屋の少年は彼女が最初に店に訪れた時の言葉を思い出した。

『あ……。夢屋の　さん……。ごめんなさい、私もう駄目みたいなんです。』

笑顔だった。そんな彼女に夢屋の少年は二つのドアを用意し、言った。

「一つはあなたと同じ病気で苦しむ患者を助ける扉です。もう一つはあなた自身の病気を治す扉です。」

彼女は迷わなかった。

「いいんですか？何処の誰とも知らない人を助けてもあなたは助か

りませんよ……。」

『いいんです。私の周りの人達は本当に優しくかった。何も出来ない私をいつも助けてくれたの……。だから、今度は私が誰かを助ける番なんです……。』

迷い無く彼女は、最初の扉を選んだ。振り返る彼女は言った。

『ありがとう。でもね、私あなたの事……。』

その先は聞こえなかった。夢屋の少年はそんな彼女を見ながら言った。

「……よ……良い……夢を……。」

彼が始めて見せた涙だろう。そして彼が初めて恋をした相手でもあった。涙を拭うその腕はもうビショビショだった。

「あなたはもう既に天使ですよ……。僕力なんか無くても……。」

彼の店。夢屋はあなたのすぐ近くにあります。あなたが望むのなに見つかるはず、彼に迷わず夢を打ち明けてください。あなたの力にきつとなってくれるはずです。

エピソード 休日のある日

エピソード 休日のある日

「又、増えましたね。」

所狭しと並ぶアンティークを手に取りながら翼が言った。

「それはお客様の代償ですから、気をつけて扱ってくださいね。」

これは失礼と元の場所にすぐさま返した翼は話を続けた。楽しいですかと……。

夢屋の少年は笑顔で答えた。

「ええ。人はとても興味深い、楽しいですよ。」

紅茶を飲みながら夢屋の少年が言った。ふーんと鼻を鳴らした翼は彼の前に座りこんだ。

「この紅茶は自分で入れたんですか？」

ええそうですね。彼はすぐに翼の分の紅茶も用意した。それを翼が一口飲むなり言った。

「おいしいですね。これ。」

ありがとうございますと少年は一礼した。そして彼はゴクゴク

と自分の入れた紅茶を喉を鳴らしながら飲む翼を見ながら話を続けた。

「私。この店を辞めようと思っていたんです。でも、いろんな人あって私の人への価値観が変わったんです。これからもいろんな人と出会いたいと最近じゃ思うようになります。」

「じゃあ又、アンティーク増えますね。」

つと翼が笑って答えた。

「ではそろそろ開店しますか。」

と少年はオープンと書かれた板をドアの取っ手に掛けた。じゃあ僕はこれで翼は店を後にしようとした。あっと立ち止まり彼は言った。

「今度はうちの部にも遊びに来てくださいよ。うまいコーヒー入れますよ。」

「ええぜひ。」

そう言って翼の後姿を見送った。

今日も夢屋は営業中。あなたの御越しをお待ちしています……。

エピソード 休日のある日（後書き）

これで夢屋は終わりです。とても短い話でしたが、いい勉強になったと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1301c/>

夢屋

2010年12月10日23時56分発行